

Open up the future 2024.10.4



「対比」から象徴的に描かれる宮沢賢治の思いを語り合う、その学びの原動力とは

国語科伴野教諭は、前期後半が終わりを迎え、進路や受験、卒業を意識する子が増えている時期である子供たちの「今の思い」を大切に、授業を組み立てておられました。まず、8月話すこと聞くこと教材「いちばん大事なものは」において、「自分にとって、一番大事にしている生き方や考え方を」、対話を通して広げる学習を行うことで、これまでの自己の経験を振り返り、考えを持つことにつなぐことねらっておられます。そして、今回の「比べて、つなげて、重ねて受け取る宮沢賢治の思い～私の生き方・考え方をまとめよう～」のご授業では、今の自分が大事にしている思いと宮沢賢治の思いを対比することで、自己の生き方を見つめ直すことにつなげていきました。この「自己の生き方を問い続ける」という「学びに向かう力」が「やまなし」の教材に向かう原動力となり、「やまなしに視点を当てた対比」「やまなしと宮沢賢治に視点を当てた対比」「やまなしと他作品に視点を当てた対比」等を通して「問い」を追究するという見方・考え方によって、象徴的に描かれる宮沢賢治の思いを豊かに想像するという探究に向かう子供の姿が顕在化されたのだと感じました。

公正・効率の視点で議論を深めていく

社会科尾田教諭「ごみのゆくえの先に見えるもの～くらしとごみ～」では、子供たちの探究が進むにつれて、大津市の廃棄物最終処分場の2箇所のうち1箇所の残余年数は、当初計画ではあと1年であり、延命措置として大阪湾の埋め立て用として毎日トラックで焼却灰が運ばれているという「フェニックス計画」にたどり着きます。子供たちは、「人工島ができれば発電所や公園に活用できるらしいよ。」「関西国際空港も前例としてあるね。」といった気付きから、「魚が焼却灰を食べちゃったら、生態系に悪い影響があるんじゃないかな。」「焼却灰は沈下していくみたいだから、住むのは危なそう。」と議論を進めていきました。その中で、「やっぱり大津市の灰を他の県に持



っていくのは大変だし、もっと近くに運んでもいいのではないかな（効率）」と考えたり、教師が「コンサート会場や大きな公園は人が来るから人のためになるね（公正）」と揺さぶったりすることで、社会科の概念を働かせて学びを焦点化させていきました。